（城西人文研究第 21 巻第 1 号）

シェイクスピアの『リア王』の材源について

小　野　　昌

序

シェイクスピアの劇には必ずと言ってよいほど，何らかの意味において材源（source）があると言われている。個々の作品において用いられている材源の種類は種々様々であり，また関わり方の程度も多様である。

この稿では『リア王』をとりあげ，材源との関わり方を調べてみることにしたい。一応の結論めいたことを先に述べておくと，どの材源とも決定的に異なっているのは，リア王と末娘のコーディリアの問題で，シェイクスピアは 2 人の死で幕を閉じるのだが，そのような結末を迎える材源はないということである。そしてこの劇作家はどの作品からどの部分を借用し，どの部分を借用しなかったのか，そしてその理由はどこにあるのだろうか。このような問題意識のもとに，シェイクスピアが材源としたと考えられているいくつかの作品との関係をプロットを中心にして解釈に余りかかわらずに，できるだけ機械的に検討してみようと思う。

1．材源と考えられている作品

父親（王）と 3 人の娘をめぐる民話は世界中いたる所にあり，今日まで何世紀にもわたって伝えられてきているが，イギリスにこの話を最初に伝えたのはジェフリー・オヴ・マンモス（Geoffrey of Monmouth, 1100?−1154）である。アーサー王伝説を最初に記載したことでも知られているが，『ブリテン王列伝』（*Historia Regum Britanniae*）を著し，アーサー王をはじめブリテ

ン諸王の伝説を広く集めている。イギリス史にはリア王に相当する実存の人物は存在しないが，17 世紀にいたるまでリア王とその後継者に関するジェフリーの記述が，アーサー王のごとくあたかも実在の人物のように，いわば歴史として扱われていたのである。

ジェフリーによるとトロイの英雄アイネイアス（Aeneas）の孫ブルート（Brute）は誤まって父を殺してしまい，トロイ族の残党を連れてブリテン島にやって来た。彼はトロイア・ノウヴァ（Troia Nova）「新しいトロイ」という意味の町トロイノヴァント（Troynovant，現在のロンドン）を造り，ブリテン王の先祖となったのである。その息子の 1 人の 8 代の子孫ブレイダド（Bladud）の息子がリアで，これに 3 人の娘の民話を結びつけたのである。

ラテン語で書かれたこの本はフランス，イギリスはもとより，ドイツやイタリアにも広まった。そして英訳もされてシェイクスピアをはじめ多くの作家の種本となったのである。そのうえブリテン島の様々な民族を同一の祖としたことによって，民族間の反目をおさえる役割をも果たすことになったのである。

『為政者の鑑』（*Mirror for Magistrates*）はイギリス史詩集とも言うべき韻文物語集であるが，リア王の末娘コーディラ（Cordila）の自伝の形をとって，紀元前 800 年に彼女が自殺にいたるまでの悲劇を語っている。

シェイクスピアの時代の人々も書物や口承によってリアの物語に親しんでいたと思われる。1586 年，ウィリアム・ウォーナー（William Warner, 1558?–1609）はノアからウィリアム征服王（William the Conqueror, 1027–87），さらにジェームズ 1 世（James I，1566–1625）にいたるまでを扱った韻文のイギリス史，『アルビオンのイギリス』（*Albion's England*）を著したがその中でもリアの物語が扱われている。

エドマンド・スペンサー（Edmund Spenser, 1552?–99）は『神仙女王』（*Faerie Queen*, 1590–96）の中の一編をトロイの神話にあて，その中でリアの話を悲劇的な調子で扱っている。

シェイクスピアに数々の材料を供給したことで有名な年代記作者であるホリンシェッド（Raphael Holinshed, c.1520–c.80）もこのテーマを扱っている。

これらの材料を使ってリア王の話を劇化したのはシェイクスピアが最初ではない。『リア王実録年代記』(*The True Chronicle History of King Lear, and his three daughters, Gonorill, Ragan and Cordella*) と題する劇が1594年に上演されたことがヘンズロウ (Philip Henslowe, ?–1616) の『日記』(*Henslowe's Diary*, 1592–1609) に記されている。1605年に出版されたこの劇は題扉に 'As it hath bene divers and sundry times lately acted' と書かれており，出版業者であり，印刷業者でもあったサイモン・スタッフォード (Simon Stafford) により印刷されたことが示されている。そして本文にある詳細なトガキによって，これが上演用の台本であったことがわかる。作者はどこにも記されておらず，様々な劇作家の可能性が指摘されてはいるがいずれも決定的ではなく不詳である。しかし登場人物や，台詞等において，この作品がシェイクスピアに与えた影響は大きなものがある。

これら6つの作品がシェイクスピアの『リア王』とどのように関わりを持っているか検討してみることにするが，それぞれの作品を年代順にならべ，略語で示して比較してみたい。

ジェフリーの『ブリテン列王伝』(H. B.)，ジョン・ヒギンズ (John Higgins) による増補による1574年版の『為政者の鑑』(Mirror)，『アルビオンのイギリス』(A. E.)，ホリンシェッドの『イギリス史』*The Second Book of The History of England*，の1587年版 (H. E.)，『神仙女王』(F. Q.)，ブロウ (Bullough) 版の『リア王実録年代記』(Leir)，シェイクスピアの『リア王』(Lear) とする。

2．王の名前

H. B.	Leir	**Mirror**	Leire	**A. E.**	Leir
H. E.	Leir	**F. Q.**	Leyr	**Leir**	Leir

ほとんどの作品がジェフリーに従っている。シェイクスピアの Lear が例外

ということになる。

3．3人の娘とその夫の名前

H. B.	Gonorilla	Duke of Albania (Magalaunus)
	Regan	Duke of Cornwall (Henuinus)
	Cordeilla	Aganippus of Franks
Mirror	Gonerell	King of Albany
	Ragan	Prince of Camber and Cornwall (Hinnine)
	Cordell	Aganippus, the King of Fraunce
A. E.	The Eldest (Gonorill)	Prince of Albanie
	The Second	Cornish Prince
	The Yongest (Cordellas)	Gallian King
H. E.	Gonorilla	Hennimus, the Duke of Cornwall
	Regan	Maglanus, the Duke of Albania
	Cordeilla	Gallia, Aganippus
F. Q.	Gonorill	Maglan, King of Scots
	Regan	King of Cambria
	Cordeill	Aganip of Celtica
Leir	Gonorill	King of Cornwall
	Ragan	King of Cambria (Morgan)
	Cordella	Gallian King

Lear	Goneril	Duke of Albany
	Regan	Duke of Cornwall
	Cordelia	King of France

リアの３人の娘の名前には多少の綴りの異同はあるものの，ほとんどジェフリーに従っている。ただしウォーナーには二番目の娘とあるだけで名前を与えていない。Leir の作者はコーディリアの名前をウォーナーから借りている。

夫達の名前とタイトルにはかなりの異いがある。ゴネリルの夫をオールバニー（スコットランドの古代の名）公爵にし，リーガンの夫をコーンウォール公爵とすることでシェイクスピアをはじめほとんどジェフリーに従っている。しかしホリンシェッドはこれを逆にしている。Leir の作者はゴネリルの夫についてはホリンシェッドに従い，レーガンの夫についてはカンブリア（ウェールズのラテン語名）王としてスペンサーに従っており，コーディリアの夫についてはウォーナーに従っている。

4．愛情テストの答え

H. B.	Gonorilla	'That she called Heaven to Witness, she loved him more than her own Soul.'
	Regan	'That she could not otherwise express her Thoughts, but that she loved him above all Creatures.'
	Cordeilla	'My Father,' said she, 'Is there any Daughter that can love her Father more than Duty requires? In my Opinion, whoever pretends to it, must disguise her real Sentiments under the Veil of Flattery. I have always loved you as a Father, nor do I yet depart from my purposed

Duty; and if you insist to have something more extorted from me, hear now the Greatness of my Affection, which I always bear you, and take this for a short Answer to all your Questions; Look how much you have, so much is your Value, and so much I love you.'

Mirror	Gonorell	they lovde him well and more Then they themselves did love, or any worldly wight.
	Ragan	(the same as above)
	Cordile	I love you ever as my father well, No otherwise, if more to know you crave: We love you chiefly for the goods you have.
A. E.	The Eldest	Her life inferior to her love.
	The Second	(the same as above)
	Cordellas	her love was such as did a child behove
H. E.	Gonorilla	'loved him more than hir owne life, which by right and reason should be most deere unto hir.'
	Regan	'more than toong could expresse, and farre above all other creatures of the world.'
	Cordeilla	'Knowing the great love and fatherlie zeale that you have alwaies borne towards me (for the which I maie not answere you otherwise than I thinke and as my conscience leadeth me) I

protest unto you, that I have loved you ever, and will continuallie (while I live) love you as my naturall father. And if you would more understand of the love that I beare you, assertaine your selfe, that so much as you have, so much you are woorth, and so much I love you, and no more,'

F. Q.	Gonorill	she much more then her owne life him lov'd.
	Regan	greater love to him profest, then all the world.
	Cordeill	she lov'd him, as behoov'd.

まずここまでの3人の娘達の答えの内容に入る前に3人の答えの長さを見てみよう。シェイクスピアを観ていると，コーディリアの答えが一番短い印象があるが，材源では全く逆になっていることがわかる。H. B., Mirror, A. E., H. E. ではコーディリアの方が雄弁である。しかも Mirror と A. E. ではリーガンの答えはなく，ゴネリルと同じということになっている。F. Q. になってコーディリアの答えが短くなってくる。分量が余りに多いので Leir と Lear の引用は割愛するが Leir ではゴネリルが 17 行，リーガンも 17 行，Lear ではゴネリル8行，リーガンも8行であり，前者のコーディリアは4行であり，後者では nothing の一語となっているが，リアに促されて3行つけ加えている。Leir と Lear において姉2人の答えの長さの一致は必ずしも偶然であるとは考えにくい。2人の同質性，さらには王国の2等分にこだわるなら，Leir の作者が同じ分量だけ舞台でしゃべらせるようにし，それに気づいたシェイクスピアがこれに従ったと見るのが自然ではないだろうか。そして Lear には Leir と同じように2人の姉達の答えの間にコーディリアの短い傍白が入っている。彼女の台詞がこの2つの劇の中で比較的短くなってくるのは当然のことで，姉達のリアに対するおもねりのことばを嫌いながら長舌をふる

うわけにはいかない。

答えの内容については，H. B. のゴネリルの「自分の命より」と言うことばは A. E.，H. E.，F. Q.，Leir そして Lear にも見られ影響力の強さがうかがわれる。そしてリーガンの答えを姉と同じにしている影響がシェイクスピアに見られるのは興味深い。(I find she names my very deed of love.)

コーディリアのことばについて，H. B. に 2 回使われている Duty は類語の動詞 behoove を含めると A. E.，F. Q.，と Leir（I canot paynt my duty forth in word.）に使われており，少し拡大して bond を含めるなら Lear（According to my Dond）にも使われている。そして H. B. の「父親が子供を愛すように」は Mirror と H. E. そして Leir（What love the child doth owe the father,/ The same to you I beare）にも用いられている。H. E. のコーディリアの最後のことば 'and no more' は Lear の 'nor more nor less' に直接影響を与えたと思われる。

H. B. でコーディリアの言った Flattery ということばが，Leir でも彼女によって 2 回使われている。Leir と Lear ではこの箇所にはいくつも台詞のことばのエコーが見られるが，ここではその指摘だけにとどめておく。

Leir には単に父親に対する愛情テストだけでなく，他の条件も含んでいる。つまり，父親の要求に対し，だれが一番早くその命令に服するかという条件である。これはコーディリアが結婚相手には愛情が先決条件であると言っているので，リアの望む王と結婚させるために考えた彼の策略なのだが，シェイクスピアは Leir の作者の考えたこのような条件は付けず，H. B. 以来の単純な愛情テストのみを採用している。シェイクスピアは伝説の骨格の部分は最後の結末を別にするとできるだけ忠実に従がおうとしているように見える。Leir にはさらに追放されたコーディリアが巡礼に変装したゴール王と会い結婚を決める場面があるが，これも採用していない。しかも Lear では結婚相手となったフランス王と愛のことばを交すこともない。登場回数もわずかに 4 回だけであるが，これは台詞の少なさと相まって，彼女をいわば象徴的な，神格化した存在にするために劇作家の行なった工夫であると考えられる。

5．王国分割の条件

H. B. And without father Delay, after Consultation with his Nobility, he bestowed his two other Daughters upon the Dukes of *Cornwal* and *Albania*, with half the Island at present, but after his Death, the Inheritance of the whole Monarchy of *Britaine*.

Mirror These after him should have Kingdom all
Between thew both, he gave it franke and free.
But nought at all, he gave of dowry me.

A. E. their Dowrie was his Throne,
At his decease: Cordellas parte was very small or none.

H. E. betwixt whome he willed and ordeined that his land should be divided after his death, and the one halfe thereof immediatelie should be assigned to them in hand: but for the third daughter Cordeilla he reserved nothing.

F. Q. That in his crowne he counted her no heire,
But twixt the other twaine his Kingdome whole did shaire.

Leir My Kingdome will I equally devide
'Twixt thy two sisters to their royall dowre,
And will bestow them worthy their deserts:
This done, because thou shalt not have the hope,

To have a childs part in the time to come,
I presently will dispossesse my selfe,
And set up these upon my princely throne.

Lear

With my two daughters' dow'rs digest the third;
Let pride, which she calls plainness, marry her.
I do invest you jointly with my power,
Pre-eminence, and all the large effects
That troop with majesty. Ourself, by monthly course,
With reservation of an hundred knights
But you to be sustain'd, shall our abode
Make with you by due turn. Only we shall retain
The name, and all th' addition to a king;
The sway, revenue, execution of the rest,
Beloved sons, be yours, which to confirm,
This coronet part between you.

基本的にはH. B. の分与のしかたを踏襲しているものが多いことがわかる。すなわち，貴族達と相談し，2人の娘とその夫にただちに国の半分を分け与え，リアの死後残りも与えるやり方である。シェイクスピアのLearの1幕1場の冒頭のケントとグロスターの会話は，リアが相談したかどうかは別にして，この分割の話がすでに貴族達の間で話題になっていることが示されている。Leirの冒頭の部分はまさに，王が貴族達に王国の分割を相談する場面で始まっている。

しかしF. Q. にいたるまで，全面的な王国の分割は王の死後という条件が示されている。シェイクスピアはLeirに従っていると思われる。しかしLeirにしてもまず王国の分割を行なってから，それが終わってから王座をすてて，

2人を王位につけるという手順を踏んでいる。Lear では3人の娘の愛情テストが終了する以前に地図を前にして，リアは王国の3分割を行ない，2人の姉達の答えが終わるとすぐに，3分の1ずつの分割を行なっている。そしてコーディリアの答えの後が引用の部分となるのだが，そこではコーディリアに予定していた領土を2人の姉達に分け，実質的な権力の委譲が行なわれており，リアの手に残るのは両公の負担となる100名の騎士だけである。そして実質的には何の権限を持たない国王の名前（The name）のみを残すのである。そこでケントの台詞，四折本によると，'Reserve thy doom'，二折本によると，'Reserve thy state' がいかに的を得た諫言であるのかわかると同時に，リアのこの行為が H. B. 以降のリアの行動からかけ離れているかをシェイクスピア自身が知っていたことを示しているとも考えられるのである。しかしこの行為は劇的な効果を考慮するならば，リアの愚かさを強調し，さらにこれ以後のリアの悲惨さを示す上では極めて効果的な変更であると言える。

6．王国分割からコーディリアとの再会にいたるまで

H. B. かなりの時間を経て，リアは両公に残りの領地を与えたが，2人は謀反を起こしリアの権力も奪ってしまう。協定によってゴネリルの夫アルバニー公は60人の兵士を与えるが，2年間の同居の後，ゴネリルはその数を30人に減らす。リアはリーガンのところへ行くが最初は歓迎されるが，1年もたたないうちにリーガンはそれを5人に減らす。リアは再びゴネリルの所にもどるが，それを1人にさせられる。

Mirror 両公は反乱を起こし王冠と権力とを奪う。ゴネリルは護衛を半分に減らす。リーガンの所に行ったリアを1年はもてなすが，従者を10人に減らし，後に5人にする。ゴネリルの所にもどったリアに彼女は1人に減らし，0（ゼロ）でも満足せよと命じる。

A. E. 両公は武力でリアから王笏をうばうが，巨額の扶助料を出すのでリアは満足する。リアは長女の所に行くが年金を減らされたので，次女の所に行くがみじめな暮らしをさせられたので，また長女の所にもどるが，リアの殺害をくわだてられる。

H. E. なかなか統治権がもらえないので，両公は武力でリアから奪い，リアは財産の分与があったが，両家を行き来するうちにしだいに減らされ従者1人となる。

F. Q. かなりの時を経てリアが王位をゆずると，長女はリアを蔑み滞在にあきあきし，リーガンの所に行くが，最初は歓迎されるがしだいに物惜しみをするようになり歓待の度を減じた。

Leir ゴネリルと暮らすリアの年金をすぐに半分にしてしまい，全部とりあげてリーガンの所に行かせようとする。リーガンは彼女の所に来たリアをゴネリルの使者を使って殺害しようとする。

Lear ゴネリルと暮らすリアに彼女は100人の家来を半分に減らす。リアはリーガンの所に行くが，リーガンは50人で姉の所に帰るようにと言い，もし家に来るなら25人にすると言う。ゴネリルは1人だって不要だと言うので荒野に出て行く。

Leir と Lear においては当然他の様々な要素がからまり，ずっと複雑な転回を示すが，一応 H. B. からの流れに共通する部分だけの要約にとどめておく。

H. B. から H. E. にいたる共通のことがらは，両公側がリアに対する反乱を起こすことである。これは先に述べたようにリアによる権力の全面的な移譲が行なわれていなかったために引き起こされるものである。その結果とし

てリアに対して，従者の形か，金の形かでみかえりが与えられることになる。F. Q. の場合には全くこのようなことはなく，単にリアに対する物惜しみと，歓待の度が減ることのみが問題とされている。すべてに共通しているのはリアが両公の間を行き来しその度ごとに何ものかを減らされることである。

従者で与えられるのが，H. B.，Mirror と Lear であり，金の形で与えられるのが A. E.，H. E. と Leir である。シェイクスピアはジェフリーに従っているが従者の人数を 60 人から 100 人に増やしている。Mirror では，はじめにどの位の人数が与えられたか示されていないが，半数から，10 人，5 人，1 人　0（ゼロ）と減らされていく。H. B. では 0（ゼロ）はないので，その点ではシェイクスピアは Mirror に近いかもしれない。金の形の減少よりも，従者の人数の方が少なくとも視覚的である点で演劇的な効果が高いと思われる。

A. E. において注目される点はゴネリルによるリアの殺害の計画である。Leir の作者はこの点を拡大して，ゴネリルとリーガンが使者を使って，リアと従者のペリラスの両者を殺害しようとするかなり長い場面（第 19 場）を設けている。しかしシェイクスピアはこれを採用しなかった。Lear においてプロットにおける採用こそないものの，Leir のこの場面でのことばと雰囲気の影響はかなり大きなものがある。

7．リアとコーディリアの再会とその後

H. B.　2 人の娘の虐待に耐えかねて，リアは我が身の不運をかこちながら船に乗りフランスに向かう。コーディリアのいる町につくと窮状を伝える手紙を使者に託す。彼女は驚き涙を流し，使者にお供は 1 人だけだと知らされる。使者に十分な金を与え，リアを病気ということにして別の町に移し，入浴，着物，食物を与えるよう命じる。一方，きちんと正装した部下 40 人をリアにつけ，準備が整ったらフランス王と自分にリアの到着を告げるよう命じる。リアは国王として丁重に歓待され，義理の息子達に国を追われたことを訴え，統治権の回復の援助をたのむ。リアはフランス王と

コーディリアと共にブリテンにもどり，義理の息子達を敗り，権力を回復し，3年を経て死にコーディリアが跡を継ぐ。5年後彼女は姉達の息子の反乱にあい，投獄され自殺する。

Mirror リアは1人でコーディリアに会いにフランスに行き，彼女に姉達の虐待を伝えると，彼女はフランス王に嘆願し軍隊を送ることになる。リアとコーディリアは勝利をおさめ，リアはうまく統治し3年後に死ぬ。コーディリアが女王となり5年間統治したが，姉達の息子の反乱が起こり，投獄され，その後甥達をのろいながら自殺する。

A. E. リアは船でフランスに渡ったが前もって自分の悲惨な状況をコーディリアに伝えておいた。彼女はリアの必要としている物のすべてをそろえるまで彼の到着を隠しておいた。フランス王はリアをもてなし，王にふさわしい生活を宮廷でおくった。義理の息子が軍隊を送り王座をリアに取りもどしてくれ，コーディリアがそのあとを継いだが，その治世は長く静かなものとはならなかった。甥達が戦争をしかけ，そのうちの1人が彼女を殺した。

H. E. リアはコーディリアの慰めを求めてフランスに行く。彼女はリアがみじめな状態にあるのを聞き，密かに服を整えるために金を送り，王としての体面を保つため何人かの召使いを雇う。準備が整ってからリアを宮殿によび，フランス王と彼女は歓迎する。2人の姉のひどいあつかいを聞き，フランス王は軍隊を召集し，コーディリアとリアと共にブリテンに行き，敵を打ち負かし，義理の息子達は殺される。リアは王国を取りもどし，2年間統治し死に，コーディリアが跡をつぎ5年間統治するが彼女の2人の甥達の反乱にあい，投獄され自殺する。

F. Q. コーディリアの所に行ったリアは，父であり王である人にふさわし

く歓迎され，国を奪った者達と戦うために軍勢を募り，王位に復帰させてくれ，王位についたまま天寿を全うして死にコーディリアに王位を継承するように遺言し，彼女は長く平和のうちに統治したが，甥達の反乱が起こり負けて長く投獄され，首を吊って死んだ。

Leir リアと忠臣ペリラスは餓死寸前の状態でフランスの海岸に着き，そこで変装したゴール王とコーディリアと会い，身分を知らされずにまず食事を与えられ，それから身の上話をしたのちコーディリアであることを知らされる。リアとコーディリアはゴール王と共にイギリスに渡り敵を打ち負かし領土を回復するが，その権利をゴール王に譲りフランスにもどろうと言う。

これらすべての材源に共通しているのはリアがフランスに行くことである。そしてコーディリアの配慮によって王にふさわしく歓迎され，彼女と共にイギリスにもどり姉達の軍を破り王位を回復することである。Leir の劇はここで終わっている。しかし他の材源はすべてリアの死後，コーディリアが女王になるが姉達の子供と戦争になり負けて投獄され自殺している。

シェイクスピアはここから完全に材源のプロットから離れ，独自のプロットを展開しているように見える。嵐になりかかっている荒野に飛び出して行くリア。その相手をするフール。リアの狂気とフールもこれまで検討した材源のどこにも存在しない。狂気のリアの場面の後ですぐ，フランス王がコーディリアと共にイギリスに上陸していることが伝えられる（3 幕 1 場)。そして深夜，嵐といなずまの中をさまようリアが登場した後，3 幕 3 場では忠臣グロスター（Gloucester）が庶子エドマンド（Edmund）の裏切りに合う場面となり，リアの援軍の情報が敵にもれることが示される。

グロスターとエドマンド，そして嫡子であるエドガー（Edgar）との関係は，父親と息子との間で，リアの父親と娘と同じ状況が繰り返し行なわれるという意味でこの劇の重要なサブプロットを形成している。これも H. B. ～

Leir には存在しない。しかしこのエピソードはシェイクスピアの創造ではなく，別の材源から借りているのでこの検討はまた別の機会にゆずらなければならない。

シェイクスピアが材源に加えたもう１つの重要なプロットの変更は，ゴネリルとリーガンの仲たがいである。２人はグロスターの庶子エドマンドをめぐり夫に対する殺意までいだいて争うのである。シェイクスピアは彼女達にリアに対する虐待の罰によってではなく，このエドマンドをめぐる醜い争いの罰による死を与えている。ゴネリルがリーガンを毒殺し，ゴネリルは自殺する。このようにしてシェイクスピアは材源には存在しない人物を登場させたり，材源の人物の組み合わせを複雑にしたりしてこの劇の悲劇性を高める工夫をしている。

リアとコーディリアの再会は他のどの作品とも異なり，フランスではなくイギリス国内のフランス軍の陣営の天幕の中で行なわれる。眠っているリアに会う直前，「お召しかえは」（Is he array'd?　Ⅳ. vii）とたずねるコーディリアの台詞に，H. B. からずっと伝えられているフランスでの彼女のリアに対する配慮の名残りが感じられる。さらにリアの「わしはフランスにいるのか」（Am I in France?）には長い伝統を変更したシェイクスピアの気持が感じられないだろうか。

コーディリアの追放によって引き起こされたイギリス国内の混乱はコーディリアの帰国によってしか回復することはできない。材源ではすべて彼女の帰国によって秩序の回復が行なわれている。しかしリアの精神の混乱は彼女をはっきり認識できずにいる。

５幕３場。この劇の最後の場である。ドーヴァー付近のブリテン軍陣営である。冒頭リアとコーディリアが捕虜となって入って来る。エドマンドとエドガーの決闘によるエドマンドの敗北，エドガーによって父グススターの臨終の様子が語られる。ゴネリルとリーガンの死。この姉達の悪の死の後には全き善の象徴たるコーディリアが登場しなければならない。しかし登場するのはリアの両腕にいだかれたすでに息絶えたコーディリアなのである。そしてリアの絶命。ここでシェイクスピアは材源と全く別の世界を造り出したかにみえる。

しかしこの場の冒頭で狂気の一瞬の回復の中で，たとえそれが捕虜の身であろうと，宮殿ではなく牢屋の中であろうと，リアはコーディリアと再会し和解が行なわれているのである。悪が滅び，そしてまた善も滅びた。悲劇の「死と再生」はここでは死の饗宴のみで，再生の気配は感じられないのである。

結　語

シェイクスピアの『リア王』の材源と考えられる主要な作品とのかなり単純な比較の作業によって，シェイクスピアのこの劇に対する制作の姿勢がかなり明らかになってきたのではないだろうか。

6. の王国分割からコーディリアとの再会にいたるまででは，シェイクスピアは基本的には H. B. に始まる伝説の枠組をかなり忠実に守っている。そして Leir の劇に見られる変化を無視している。そして 7. のコーディリアとの再会とその後の部分から全く材源から離れて自由な書き方をし，最後にリアとコーディリアの死によって，全く逆の方向に向かったように見える。しかしはたしてそうなのだろうか。シェイクスピアはむしろこの伝説のリアの世界にもどったのだとは考えられないだろうか。

H. B. をはじめとする伝説の話はなるほどシェイクスピアの『リア王』からみるならば，リアは王位を回復し，コーディリアがその跡を継いで女王になるのであるから，その部分だけに限定するならハッピー・エンドと言えないこともない。しかし Leir を除いた他の作品はリアの復権で終わっているわけではなく，コーディリアの長い投獄生活の後の自殺で終わっていることを思い出す必要があるであろう。そしてまたこれらの作品の調子は極めて悲劇的なのである。

リアはなぜまず国を 3 等分しておきながら愛情テストなどをやったのか，そして，なぜコーディリアはあのような頑なな態度を取るのか。そしてリアはあの答えにあれほど激怒しなければならないのか。これらの基本的な疑問にシェイクスピアは全く答えていないように見える。しかしそれは民話がそのようになっているからなのではないだろうか。シェイクスピアは観客のだれもがよく

知っている伝説・民話の世界，観客が安心して入って行ける世界にまず彼等を引き込んで行くのである。そこで導入部分においてはできるだけ民話に忠実に，ほとんど変更の手を加えることを注意深く避けたのである。そうした上で，伝説のプロットと直接に関わらない部分において劇を複雑化させて行くのである。伝説にはないリアの狂気も道化の登場も，グロスターとエドガー，エドモンドの脇筋の導入も，ゴネリルとリーガンのエドモンドをめぐる争いも結局のところリアの苦悩の拡大再生産の手段として用いられたに過ぎないのではないだろうか。

このように見てくると我々はシェイクスピアは伝説や民話の持つ原初的な感覚を利用しつつ，様々な演劇的なテクニックを駆使しながら宇宙的な拡がりをもつ壮大な悲劇に仕上げていったのだと考えられるのである。

〔記　本文中のシェイクスピアの引用は The Riverside Shakespeare による。その他の原文の引用はすべて *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*; ed. by Geoffrey Bullough, vol. Ⅲ, Routeledge and Kegan Paul, 1973 による〕